

幻の夜郎国（其の二）

—— 悲劇の英雄像 ——

君 島 久 子

An Illusory Country Yelang

—— **The Myth of the Tragic Hero Zhuwang** ——

Hisako Kimishima

Summary

The article is a sequel to the previous article “An Illusory Country Yelang: On the Myth of Zhuwang.” Since the writing of the previous article, further research has been made in China. Based on the reports of the latest study conducted in China, this article introduces various legends concerning Zhuwang transmitted in different tribes and Zhuwang’s shrines located in various parts of the country. Although a few comments have been added, the purpose of this article is to provide correct data for other researchers. The analysis will be reported in future publications.

Received Nov. 30, 1990

Key word: Yelang Country, Myth of Zhuwang, Zhuwang’s shrines

一 竹王神話をめぐって

かつて司馬遷の『史記』西南夷列伝に、「西南夷の君長、什を以て數え、夜郎最大なり」と謳われ、2,000年前に富み栄えた夜郎王国がその後忽然として消え失せ、その国の正確な版図や民族はようとしてさだかではない。竹中より生誕した竹王の末裔は、現在どの地方のどの民族なのであろうか。中国の学会でも活発な討論が行われた。前稿、「幻の夜郎国—竹王神話をめぐって—」に於いては、その討論の一端を紹介し、併せて筆者の見解を述べた。（君島1988・89）

ここで今後の議論の展開のためにも、先づ夜郎に関する古い記録、司馬遷の『史記』西南夷列伝を挙げる必要がある。

西南夷の君長、什を以て數え、夜郎最大なり。其の西、靡莫^{ひばく}の屬、什を以て數え、滇自り以北、君長什を以て數え、邛都^{きやうと}最大なり。此皆魑結、耕田し、邑聚有り。其の外、西のかた同師より、以東、北のかた牂榆^{じやうゆ}に至るまで、名づけて雋・昆明為り。皆編髮し、

畜に随いて遷徙し、常處する母く、君長母く、地方數千里可りなり。嵩自り以東北、君長、什を以て數え、徙・笮都最大なり。笮自り以東北、君長、什を以て數え、丹・駘最大なり。其の俗、或いは土箸し、或いは移徙し、蜀の西に在り。丹・駘自り以東北、君長、什を以て數え、白馬最大にして、皆氏類なり。此皆巴蜀の西南外の蠻夷なり。〔『史記』卷116西南夷列伝〕

これは元鼎六（前111）年より元封元（前110）年までの数カ月、司馬遷がフィールドワークによって得た西南夷及びその周辺の情報である。この簡潔な表現の中に、夜郎を中心とするグループ、その西に滇を中心とするグループ、滇の北に邛都を中心とするグループが存在し、それらが皆「魑結・耕田・邑聚有り」の農耕民であることを語っている。一方、嵩・昆明については、「編髮、随畜遷徙」する遊牧民の特色を述べている。更に笮・丹・駘・白馬等を「皆氏類也」とし、「此皆巴蜀西南外蠻夷也」とまとめている。これだけ広範囲の地域を、地理的にも、また民族の特色をも把握して記録しているのは見事だが、現実にはどのあたりまでか、実地の見聞に拠るものなのか定かではない。ともあれ夜郎についての位置とその周辺は、おぼろげながら把握することができる。

さて竹王神話の登場は、晋の『華陽国志』を待たねばならない。司馬遷がわずか数カ月の「走馬看花」の慌ただしいフィールドであるのに対して『華陽国志』の著者常璩は、蜀郡江原県（今の四川省崇慶県）の人、つまり原地に近い出身であるから、竹王神話が彼の手によって始めて採録されたのも首肯できるし、その意義も大きい。

南中、昔に在りては、蓋し夷越の地なり。滇・濮・句町・夜郎・葉榆・桐師・嵩唐の侯王国、十を以て數う。編髮・左衽にして、畜に随いて遷徙し、能く相い雄長する莫し。……

竹王なる者有り、遯水に興る。一女子、水濱に浣うもの有り。三節の大竹、流れて女子の足間に入る有り。之を推せども去ることを肯せず、兒声有るを聞き、取りて持ち帰り、之を破るに、一男児を得たり。長養して才武有り。遂に夷狄に雄たり。氏は竹を以て姓を為せり。破る所の竹を野に捐つるに竹林を成す。今、竹王祠の竹林、是れなり。王、従人と嘗て大石の上に止まり、羹を作るを命ず。従者曰く「水無し」と。王、劍を以て石を撃つに、水出ず、今、王水、是なり。後、漸く驕恣なり……

武帝、転じて唐蒙を拜して都尉と為し、牂柯を聞かんとし、重幣を以て諸種の侯王に諭告せしむるに、侯王服従す。困って竹王を斬り、牂柯郡を置き、呉覇を以て太守と為す。越嵩・朱提・益州の四郡を置くに及べり。後、夷濮、城を阻み、竹王の血氣の生ずる所に非ざるを怨訴し、後嗣を立てんことを求む。覇、表して其の三子を封じて侯に列し、死して父祠に配食す。今の竹王三郎神、是れなり。〔『華陽国志』卷四、南中志〕

このほか、『後漢書』、『水経注』その他に記載がある。

これらの記載の中で、竹中から生まれた男児が、やがて「遂に夷狄に雄たり」となること

や、竹王が遼水（今の貴州西部北盤江一帯）に興ること、また竹王が殺されたとき、竹王が抛って立つところの民族は、「夷濮」と称される人々であることがわかる。この夷濮は又、『後漢書』と『水経注』には「夷僚咸竹王の血気の生ずる所に非らざるを以て」とあり、「夷僚」に変わっている。この表記の変化に対しても議論があるが、今はさておき、ここで夜郎の民族名をあげるならば、夷濮・夷僚がその主要な民族集団であったことだけが唯一の手がかりである。

ではこの夷濮・夷僚は、如何なる民族なのであろうか。つまり夜郎国、竹王神話の担い手は誰かという論争は、このあたりを分岐点として様々に意見が別れていくのである。

夜郎国の版図とみなされている貴州省を中心とする地域は、現在、苗族、侗族、布依族、仡佬族、彝族等が居住しており、まさに民族の集居地である。したがって議論も百出しているが、前稿では、苗族説、百越説（特に布依説）、百越（壮、布依、仡佬、それに水、侗）の夜郎部族連盟説、仡佬説、彝族説を紹介し、それに対する異論にもふれた。これらの諸説は、古文献記載の夜郎国に関する資料をもとにして、組立てられた論説であるため、筆者は夜郎国の創世神話である「竹王神話」に視点を据えて考えてみた。

一つの民族集団が、創世神話を生み出す背景には、それ相応の必然性があるはずである。竹王神話には、竹中から誕生して偉大な王となったことが、その民族あるいは部族集団の誇りであり、信仰の対象でなければならない。また口頭伝承である限り、一篇の神話のみで忽然と消え失せるはずはなく、必ずや神話の母胎となった共通要素を有する類話が、変容しつつも何処かに伝えられている可能性がある。

かかる見地から、前稿に於いては竹中生誕伝承に焦点をあて、探索した結果を紹介した。1930年代採録による滇桂境界の白傣の伝承。1980年代筆者の現地採録を含む貴州省威寧県龍街区馬街に住む青彝の伝承三種。四川省金沙江のほとりの藏族の伝承。雲南省怒江のほとりの僳僳族の伝承。更に追加資料として雲南省彝族的伝承等がある。

次に「竹王神話」を生み出し、支える土壌には竹に対する特別の信仰もしくは崇拜の習俗をもつ民族として、雲南省の僳族白夷の調査報告。雲南省澂江松子園の白傣の「金竹」霊位の習俗、広西降林、那坡および隣接地の雲南富林県の「竹祭」の事例等をあげたが、これらの習俗はまた、滇、川、黔、桂の彝族に共通してみられる習俗であるといえる。

以上にあげた竹中生誕の神話、並びに竹崇拜の習俗の事例だけでは極めて不十分であるが、ここまでの資料での共通要素をあげればこれらの神話や習俗の担い手は、いずれもチベット・ビルマ系語族に属しており、中でも白彝系（白傣、青彝を含む）の人々である。

白彝については二通りの見方があり、現在の中国では、黒彝と白彝は同じ血縁関係にあるが、歴史的段階を経て、支配・被支配の関係になり、黒・白に分かれたという見解をとっている。しかしもう一方には、彝族は黒彝であって、白彝はかつて黒彝に服属した土着民や戦いその他で捕らわれてきた人々であり、純粹の彝族ではないとする見方がある。この点につ

いては、彝族の構成が極めて複雑多岐にわたっている現状に於いては、一つの課題として残るであろう。(君島 1988. 761-788, 1989. 79-101)

ともあれ前稿資料の範囲内では、彝族、特に白彝系の人々が、竹中生誕伝承や竹崇拜習俗の担い手として、最も有力であるという結論に達したのである。

さて前稿発表以後、中国では布依族の習族や、侗族の伝承などが、相ついで報告された。本稿ではその後の新たな資料から、如何なる展開が見られるかを検討してみたい。

先づは、苗族、侗族、仡佬族、壮族などの竹王に関する伝承を紹介し、次には伝承に深くかかわる竹王祠、竹王墓の存在に手がかりを求めてみたい。

二 竹王に関わる諸伝承

貴州省長順県一帯の苗族に伝承する「夜郎王の伝説」を次に紹介する。

- (1) 昔、ある事情で太い楠竹の筒の中に入れられ、川に流された赤子が、洗濯女に拾われ、女主人にとどけられる。大竹筒の中をみると男の子だったので、夫の族長も喜び、実子の女の子と双子ということにした。楠竹(金竹)の中から現れたので「金哥」女の子を「金妹」と呼び、文武両道の教育をし、達人となった。族長は満足し、政務をまかせ、金哥が十九才の時、老族長は死んだ。彼が族長になると、氏族は益々発展し、金哥の名声も貴州中にひびいた。貴州の各族は外来部族の侵略と干渉に抵抗するために、連合して夜郎国を建て、金哥を国王とした。彼は貴州一帯を支配し、郎山、遵義、安順、興義、福泉等の地に首府を設立し、兵を養い、経済文化の発展につとめたという。(金 1989 3-4)

つづいて、苗族と共に同じ貴州に居住する侗族の伝承「侗族竹王の伝説」をあげてみる。

- (2) 科擧の試験に合格した学者が、妻をともなって京に帰る途中、賊に殺され、妻をうばわれた。京に着くと賊はこの学者になりすまして官についた。まもなく妻は男の子を生んだが、賊は子供が後日父の仇を打つことを恐れて、部下に殺すことを命じた。善良な部下は子供の命を救うべく、大竹筒の中に赤子を入れ、よくふさいで大河に流した。一人の尼が川にきて水を汲もうとすると、大竹筒が水桶に入った。庵に持ち帰って開けてみると男の子がいた。尼はこの子を養育し、優れた人材に成長した。その後、彼は出生の秘密を知り、発憤して更に学問にはげみ、科擧の試験に合格して大官となり、父の名をかたっていた奸臣を征敗し、実母と対面した。大竹筒が、彼の第二の生命をあたえたので、人々は彼を「竹王」と呼んだ。(何 1989 236)

以上の二例は、竹から生まれたのではなく、竹の中に入って流され、第二の生命を得たともいうべきか。

湖南省靖県、綏寧、城歩一帯に伝承している侗族の「竹王楊六郎」は大竹の中から誕生している。

(3) 飛山寨の楊六郎、本名楊竹郎は、母が河で洗濯をしている時、流れてきた大竹の中から生まれたもので、七日日には牛を放牧し、その後虎退治など武勇をはせる。成人して梅山で法を学んで帰る。三年六カ月の間、毎夜裏の竹林で法をみがく。妹が見にいくと、竹林の幹から兵馬が伸びている。人に見られ効めがなくなったので、更に四日間、三本の竹矢を薬で煮る。それまで戸を開けぬようにいわれた妹は、心配になり、約束の少し前に戸を開けてしまう。やがて皇帝の軍隊と戦ったが、彼の人馬は戦うことが出来ず敗れる。今も竹王廟の神座には、二本の羅漢竹が祀られている。（林河 1985 43-44）

貴州省道真一帯に伝承する、仡佬族の「竹王」の伝説。（潘 1986 19-20）

(4) 昔、人々は高山に住むことは願わなかったが、平地の居住者が増大し、争いが起こったため、夜郎が一族をひきいて高山を開拓し、家園を建設した。五穀豊かな楽園は平地人の注目をひき、略奪になやまされるようになった。夜郎は平地人との戦いに何度も勝ったが、その度に平地人の侵略ははげしさを増し、高地人は夜もねむれぬありさまであった。夜郎はこれをうれいて「夜郎死す」の報を平地に伝え、自らは楠竹園の岩洞に身をかくした。平地人は一大攻撃をかけてきた。夜郎の作戦は成功し、高地人はかれらを大敗させた。高地人は皆夜郎のように強いと感じた平地人は略奪をやめた。夜郎は楠竹園で竹を培植することにつとめ、竹も見事に育っていたが、ある年突然、まっ白な花が咲いた。竹の死を知った夜郎は、竹を切らせて兜を編み、席を織らせた。以後、竹は百年に一度花を開く。人々は竹に対する夜郎の苦心照料に感謝して、彼を「竹王」とよんだ。同じ仡佬族の伝承で、華節地区一帯に広範囲に流伝している話に「竹王の伝説」がある。

(5) 昔、娘が河で洗濯をしていると、水中から太い竹筒が現れ、彼女のそばに漂ってきた。手にとってみると、竹筒の中から赤子の泣き声をする。竹がさけて男の子が出てきたので、「篤筒」と名づけて、大事に育てた。やがて立派な若者に成長し、よく母をたすけて働いた。狩りをしている時、麻畑にいた母が虎にさらわれた。母の死体と虎を発見した彼は、虎をなぐり殺して皮をはぎ、母の屍を包んで吊葬を行った。篤筒が虎を打ち殺した武勇伝は各地にひろまり、多くの寨からの要望で、頭領となった。彼は兵馬を養い、強力な国をつくりあげ夜郎国と名づけた。彼が竹中から生まれたので、人々は竹王と呼んだ。彼は母が竹筒をひろい上げてくれた河の名を「竹水」と改め、母の住んでいた所に「竹娘廟」を建てた。竹王の死後、彼を記念して、各家では、水缸のそばに竹筒を立て、一方を穴のあいた胡芦にさしこみ、それで水をくみ、竹王を忍んだ。息子が旅立つ時、母親は竹筒胡芦で水をくみ、息子に飲ませる。「竹娘」でくんだ水を飲めば一路平安であるし、息子が家に帰ったとき「竹娘」でくんだ水を飲めば、邪を除き、長寿をまっとうすると信じられている。（潘 1986 21-23）

同じ華節地区には、竹王の後日譚ともいふべき、「賽竹三郎」の話も伝承している。

(6) 夜郎国王篤筒は老いた。七人の息子の誰に位をゆずるかを、賽馬比箭で決めることに

した。六人の息子はゴールインも同時、射落した的の数も同じであった。後から会場にきた竹三郎は、兄弟達の倍の速さで馬を走らせ、射落した的の数も二倍あった。父王は彼に王位をゆずった。夜郎国は益々栄えたが、ある年雲南の黒羅部族の頭目が、幾千の白羅をひきいて攻め込んだ。竹三郎は防戦したが及ばず色海底で戦死した。竹三郎の死後、乞佬人は彼をしのんで、毎年立春の日、村々で賽馬比箭（騎射）を挙行し、優勝者は更に国賽に出場する。国賽で優勝した筆頭者一名が「竹三郎」と呼ばれる。連続三回えらばれると非常な名誉で、その馬も名誉を得る。この「賽竹三郎」は代々伝えられ、乞佬人達の初春の遊戯として楽しまれている。（潘 1986, 24-26）

貴州省西南部の布依族に「竹王の伝説」というのがある。地域も北盤江流域であるが、『華陽国志』の内容とあまりにも酷似しているため、ストーリーの紹介は割合する。（黄 1985）次に紹介する侗族の話は、湖南省の靖県、綏寧、城歩一帯に伝承している「竹王楊六郎」と呼ばれるもので、竹中生誕伝承であり、同時にあとから述べる、「竹中育兵」の故事にも連らなるものである。

(7) 飛山寨の楊六郎、本名楊竹郎は、母が川で洗濯をしている時、流れてきた大竹の中から生まれたもので、七日目には牛を放牧し、その後虎退治などの武勇をはせる。成人して梅山で法を学んで帰る。二年六カ月の間、毎夜裏の竹林で法をみがく、妹が見にいくと、竹林の幹から兵馬が伸びている。人に見られて効めが無くなったので、更に一室にこもって三本の竹矢を薬で煮る。四日間戸を開けぬよういわれた妹は、心配のあまり約束の少し前に、戸を開けてしまう。やがて皇帝の軍隊と戦ったが、彼の人馬は戦うことが出来ず敗れる。今も竹王廟の神座には、二本の羅漢が祀られている。（林 1985, 43-44）これは、竹王が竹中でひそかに兵を養い、造反をくわだてて皇帝と戦うが失敗する話で最後に「竹王廟」の存在が語られている。

この竹中で兵を養う、いわゆる「竹中育兵」のモチーフは、乞佬族の伝承にもある。更にあとから述べる「蜂と化して恨みをはらす」というモチーフも、乞佬族にあるので、ごく簡単に紹介する。

(8) 金竹の生い繁る中で育った「竹生」は、仙人に竹林で人馬を養う秘法を伝授され、ひそかにその方法を行っていたが、母親に邪魔をされたため、育った人馬は動くことが出来ず失敗する。（潘 1986, 88-91）

また蜂に化す話は「金竹」と題して語られている。金竹が大事に育てた竹の精が、毎夜彼を故郷に残した妻のもとへ運んでくれる。彼は都で罪を着せられ、皇帝から首を切られるが、父親に心臓と肝をかめに入れておくよう遺言する。その通りにして、予定の一日前にふたを開けると、いっせいに蜂が飛び出し、都へ飛んで皇帝を刺し殺してしまう。（潘 1986, 83-87）

次の「莫一大王」は、壮族の有名な英雄伝説であるが、この中に「竹中育兵」と、蜂に化して仇を打つモチーフがある。

壮族の民間伝承研究家の藍鴻恩氏が、「竹王伝説」と密接に関係していると指摘したものである。（藍 1981, 221）

- (9) 昔、南丹州地方に、非常に聡明な牛飼いの子供がいた。彼は超能力を持ち、水災や旱災から人々を救った。やがて頭領に推され、莫一大王と称された。彼は民衆を率いて搬山造海を行い造塩の仕事を成し遂げ、また兵馬を畜え、自らも強大な弓矢を射た。皇帝がこれを知り、彼を官兵に包囲させたが、彼は頭帕を解いて一振り、虹の橋に変じて山から山へ飛び移る。失敗した皇帝は彼を官として登用したのち、造反の悪名で殺そうとした。

彼は深潭の岩洞に身をかくし、方策をねった。裏山に竹を植え、自らは岩洞中で紙馬をつくる。三十六日間人気にふれなければ、本当の人馬になるはずであった。ところが母親が突然入ってきて失敗する。裏山の竹は異常にのびて、巡視の役人に切られる。竹の節ごとに武器を持った人馬が現れたが、みな眼を閉じていた。役人はすべての竹を切り、人馬はすべて死に流血は河となった。莫一は頭帕を天に向かって投げ、虹の橋に変じて逃れようとしたが時おそく、その術を破られて彼は首を切られる。その首を収めた瓦缸から一群の蜜蜂がいっせいに飛び出し、京城をおそって皇帝や国師や將軍どもを刺したので頭や顔がはれ上ってしまったという。（藍 1981, 221-229）

紅水河中流に伝承する壮族の「金倫」とよばれる英雄伝も「莫一大王」にストーリーは類似しているが、彼が竹の子から生まれている点がこの一連の伝承中では異色である。

- (10) 金倫は母の育てた竹林の竹の子の中から誕生した。其の後のストーリーは莫一にほぼ同じである。……彼の死後、家の裏に頭髪を埋めると、三日後に竹の子がのびてきた。姨娘がそれを嫌って切りさいてしまう。見るとどの竹の子にも小さな人がいて、未だ眼が開いていなかった。七日間で頭ができ、二十一日で身体ができ、四十九日で人が完成し、馬に乗り皇兵を打ち敗ることが出来るはずであった。竹の子の中の兵は、日数が足りなかつたので敗れた。家人が竹の子を塩漬けにすると、一群の黄蜂に変じて飛び出し、京城の皇帝の体をくまなく刺した。（梁 1990）

以上、竹王に関する伝承を11篇紹介した。苗族、侗族、仡佬族、布依族、侗族、壮族、これら諸民族の伝承は、先の論文で挙げた夜郎各族説の、それぞれの傍証としても効果的であるし、また各族の歴史や風俗と照合させても興味ある解釈が可能である。しかしここでは、単に竹王神話との関りに焦点をあて、どのように関係し、どう発展しているかを見て行きたい。

まず(1)苗族の「夜郎王の伝説」。(2)の「侗族竹王の伝説」。(3)仡佬族の「竹王」までは、主人公が、直接竹中より誕生したのではなく、「長養して才武あり、遂に夷狄に雄」となった竹王の伝承を基盤として、あらたなストーリーとして語られたものである。

- (4) 仡佬族の「竹王の伝説」。(6)布依族の「竹王の伝説」。(7)侗族「竹王楊六郎」（前半の部

分)は、大竹から出生した男子が、まさしく人格、武勇共にすぐれ、強力な国をつくりあげ竹王と呼ばれるまでを語っているが、これは『華陽国志』に記された竹王神話の構造上から見て重要な部分である。

「竹王なる者有り。遯水に興る。一女子、水濱に浣うもの有り。三節の大竹、流れて女子の足間に入る有り。」この大竹から一男児が誕生し、長養して才武にたけ、「遂に夷狄に雄たり」までがこの神話の第一段目の山であり、かつ基本的な部分である。このあと、破った竹をすてた所が竹林となったり、竹王が大石を剣で撃って水を出すなどの民間伝説の英雄にふさわしい超能力を示す属性が附加される。

第二段目は事情が一変する。漢帝国の野望の鋒先は牂柯を開くことに向けられ、「諸種の侯王に諭告せしむるに、侯王、服従す。因って竹王を斬り、牂柯郡を」置いたのである。竹王は何故斬られたか。服従しなかったからである。彼は武帝という一大権力の権化に対して、果敢に双方向抵抗して、敗れたのである。この敗者の怨みや遺憾の思いを抱きながら、夷濮たちは、抵抗を試みる。

「夷濮、城を阻み、威、竹王の血気の生ずる所に非ざるを怨訴し、」つまり、わが竹王は、ただの人間から生れたのではない。竹中生誕という崇高なお生れなのだと訴える。そこには歴然と竹崇拜の観念が現れている。

先に紹介した伝承の中の(7)侗族の竹王楊六郎。(8)仡佬の「竹王」及び「金竹」。(9)壮族の「莫一大王」。さらには(10)「金倫」が、この第二段目の発展したものと考えられる。

そして最後に、夷濮が「後嗣を立てんことを求め」たため、「其の三子を封じて侯に列し、死して父祠に配食す。今、竹王三郎神これなり」を第三段とし、竹王の三子の存在と、三子もまた祠られたことが明らかにされており、このモチーフが、(5)仡佬族の「賽竹三郎」に語られており、あとに述べる「竹三郎祠」とも連なっている。

さて、ここにあげた竹中育兵の伝承は、その主役が、また各民族の伝承中の英雄、もしくは歴史上の英雄と結びついて、次のように広範囲に発展するのである。即ち、梁庭望教授によれば布依族の中では、特に鎮宇一帯の伝承では「徳者」と呼ばれており、花溪では「金竹縁」と呼ぶが、他の布依族地区では「報子」、或は「得者」と呼ばれている。但し育兵の時間は、いずれも八十一日間である。「徳者」だけは、首を竹林に埋めて育兵する話になっている。

壮族においては、最も有名な民族英雄「莫一大王」が桂西北に流伝しており、右江地区は「岑勝」、紅水河中流の話は「金倫」、云南省文山の壮族地区では、歴史的に知られた「儂智高」の伝説の中に竹節育兵のモチーフが附加されている。また、广西南部の中国とベトナムの辺境一帯に流伝するものは「黄花」と呼ばれている。

侗族では、清代の民族英雄「吳勉」の伝記の中に語られている。

毛南族は「覃三九」と稱し、仡佬族は「吳平大王」と呼ばれている。

この竹節育兵のテーマは、壮侗語族の中に広く流伝しており、北は湘西南侗族地区から、

南は中越辺境に至るまで広範囲に語られており、常に英雄人物と結びつき、その伝記の中で語られている。（梁 1990）という。

以上は壮，布依，侗，毛南，仡佬等，いわゆる壮侗語族の系統に属する人々の伝説であるが、このテーマは彝族にも存在するのである。即ち「嶺表紀蠻」によれば、

其人（ロロ）鬼神を迷信し、病有らば惟巫の命ずる所、服従せざるなし。其の祖は龕上に竹木両片を供奉せるものにして、一は短く、一は長く、長きを神公と為し、短きを神母と為す。蛮人説う所に抛ると、「昔、竹一区有り、茂密にして修偉、竹毎に節の内に人馬を蔵し、弓箭極めて多く、竹老を俟ちて、即ち出でて天下を奪取せんとす。たまたま皇帝有りてこの間を過ぐるに、その輿の太き棒、折れしたため、竹を斬ることを命ず、竹を断つるに人馬現れ、大いに驚き、ただちに竹林を焚くことを命ず、頃刻にして灰燼と成り、人馬盡く死す。其の首領を「康熙支點王」と曰う、煙に乗りて上天に去り、其時至らざれば、また下凡せず』（劉 1934, 298）

とあり、彼らもまたこの伝承の保持者であることがわかるのである。この資料は、前稿において白彝（ロロ）の伝承資料に加えるべきであったろう。

以上、全体を通観すると、従来、竹王神話について、その竹中生誕を中心とした、第一段のみがうたわれてきた感があったが、今回あらためて、この伝説は、第二段目の、竹王の悲劇と、それをいたむ夷濮の、怨訴の声の方に、力点がおかれていたことを知るのである。絶大な力に立向かって敗れた悲劇の英雄竹王の伝説は、惜しくも事なかばにして策を破られ敗北する「竹中育兵」の故事へと発展し、たえず中央の圧迫と戦いながら造反を謀る少数民族の英雄像とも重なり合って、強い共感と支持を得つゝ展開してきたものと思われる。

民族の英雄竹王は、彼を信奉する人びとによって祠られてきた。竹王祠、竹王廟などの存在がそれを物語っている。次には各地に散在する竹王祠について報告し、若干の意見を述べてみたい。

三 竹王祠 竹王廟 の所在

『華陽国志』伝える所の竹王は、以上述べたように民族の雄であり、悲劇の英雄であった。武帝は竹王を斬ったが、「后、夷濮城を阻みて、威、竹王の血氣の生ずる所に非ざるを怨訴し、後嗣を立てんことを求めた。牂柯郡太守の呉覇は、表して竹王の三子を侯に封じ、死後は父祠に配食した。今、竹王三郎神、是である。」というから「竹王祠」と、息子の「竹王三郎神」が、当時すでに祠られていたわけである。更に同書には、

夜郎県。郡治なり。遯水有り、広鬱林に通ず。竹王三郎祠有り、甚だ靈響有るなり。

とあって、竹王三郎祠の表現も見え、靈頭あらたかである。と結ぶ。

また『後漢書』西南夷列伝に述べる竹王神話の末尾にも、

天子乃ち其の三子を封じて侯と為せり。死して其の父に配食す。今、夜郎県に、竹王

三郎神有り。是れなり。

とあり、前書とほぼ同文の『水経注』温水の条の記載にも、

夷狄、威怨むに、竹王の血気の生ずる所に非ざるを以てし、為に祠を立てんことを求む。

とあって、竹王祠の記載があり、つづいて「三子を封じて侯と為し、死するに及び父廟に配す。今、竹王三郎祠、其の神なり」という。

以上の記載から、すでにこれらの文献の書かれた時代には、夜郎県に竹王祠なるものが存在し、息子の三郎神も祀られていた。その後も竹王の崇拝者たちによって、その祠は建てられたであろう。先ずは現在わかる範囲で、その所在を挙げ、どのような民族が、この竹王祠を祀っているのか。「祠を立てんことを求」めた「濮」「僚」とはいったい現在の何族にあたるのであろうか。果たしてその手がかりは見出せるものかどうか。

竹王祠の存在は、詩人たちにも詠じられてきた。早くは唐の詩人、薛濤によって、四川省の樂山県西郊竹公溪にある「題竹郎廟」が詠まれている。

竹郎廟前古木多く、夕陽沈沈山更に緑なり。村々から笛声有りて、声々尽く是れ迎郎曲。(『全唐詩 薛濤六』P4662 中華書局1960年版)

このほか各地の竹王廟や竹王祠が詩人の詩にうたわれている。同じ四川省の榮県の「竹王祠」は城東浣沙溪岸にあるが、宋の陸游の詩「入榮州境」にも

渺然孤城天一方、伝うる者或いは古夜郎と云う。(王 1981, 200-215)

とある。また湖南省では『通志』の引く「五阮亭詩」に、

竹公溪のほとり水茫々、溪上の人家竹王を饗^{まつ}る。銅鼓蛮歌競い合い、竹林深き外に三郎を拝す。(何 1989)

とある。また『黔遊記』などの筆紀類にも記載がある。

竹王祠、楊老駅に在り。清平県の西三十里、三月香火極めて盛んなり。

これらの記載から、竹王祠の存在した場所や様子がわかり、祭の時期が春三月である事。その土地の蛮民が祀っている事。銅鼓を鳴らしていることなどが推察できる。しかしどのような民族が祀っているのかが、さだかではない。わずかに次の例にその名を見ることができる。

即ち貴州省の『遵義府志』に、竹王墓を指して、

其の墓、石槨頗る大にして、槨の両壁に花草人物の類を刻す。其俗漢人ならず。……其人悉く是れ苗装。(張 1979, 213-224)

とある。夜郎苗族説を唱える張英志氏は、この記載も、ひとつの根拠としている。

苗族についてはまた『湖南通志』が「乾州府志」を引いて、

竹王廟は、州の北五里、雅溪に在り、俗に白帝天皇と称されているのがこれである。紅苗、極めて崇拜し、之を奉じている。(何 1989.)

幻の夜郎国（其の二）

とあり、苗俗のうち紅苗と呼ばれる人々が祀っていることがわかる。この神は厳格な神らしく、祭りの期間はさまざまな禁忌がある。

屠沽を禁じ、釣猟を忌み、赤を着ず、楽をなさず、牲を献じ、不謹なもの有れば、則ち疾疫瘴癘の災をなす。故に其虔なること此の如し。遇々冤忿あれば、必ず廟に告げ神に誓い、猟を刺し血を酒中に滴し、飲みて以て盟心とす。（何 1989.）

ところが、『西陽直隴州志』によると、同じ雅溪（鴉溪）の白帝廟に関して、内容を異にする記載がある。

今、白帝廟に塑像三人あり。……乾州（今乾城県、紅苗一百五十寨を轄し、本夜郎の地なり）鴉溪の楊氏、その母竜に感じて三男を生む。或いは竹王江氏と曰う。（王 1981, 200-215）

この江氏の音は、金氏に近いので、或は、「金竹公多同」に同じとも考えられる。夜郎巴蜀説を唱える王家佑氏は、右の文面を挙げた上で、「この志直接巴人の『白帝』を以て夜郎の竹王となす」といい、「竹王即ち巴蜀王である」と論じ、また『貴州苗族考』に書かれた「苗族中、竹王を祀るは、普遍的な習慣である」を批判して、「竹王を祀る苗族は、西苗であり、西苗は即ち西土から来た巴蜀人である」と主張する。

このように見解が別れるところを見るとこの苗族という名称についても、直ちに結論が出るとは思われない。

以上あげた竹王祠や竹王墓の所在を一応整理してみると、以下のようになる。

貴州

清平県（楊老驛，黄糸驛）竹王祠，『黔游記』，『黔囊』

遵義府 竹王墓 『遵義府志』

広西

陽朔県 竹皇祠 『太平寰宇記』（巻62陽朔県）

蒼梧県 竹王祠 『蒼梧県志』

四川

梁山県 竹郎廟 『全唐詩 題竹郎廟』

榮県 竹王祠 『太平御覧』（巻166「蜀記」を引く）

邛州 竹王三郎廟 『元豊九域志』（巻7）

大邑県 竹王廟 『太平寰宇記』（巻75）

雲南

通海県 竹王祠 『南詔野史』（馬長壽引く）

湖南

乾州（雅溪）竹王廟 『乾州府志』

湖北 竹王祠 『建置志』（祠廟，何積全引く）（以上，劉琳，何積全論文参照）

これら竹王祠の所在は、貴州西南部を中心に広西、四川、雲南、そして湖北、湖南にまで広がっている。この分布状況から、どのような解釈が可能であろうか。

張英志氏は「竹王伝説、竹王祠、竹王三郎神廟、竹王墓まで、すべて夜郎濮人の遷徙に随って広範に流伝したもの」（張1979. 223—224）と見ており、劉琳氏は「これらの地区は、すべて古代僚人の分布地域、或は足跡の至る地区である（劉1983. 215—216）」という。何積全氏も、劉氏の見解と同じく、竹王祠等の分布は、およそ竹王伝説の流伝範囲と一致し、その地区は、僚族、及びその後代の居住区、或は足跡の至る所の地区である（何1989. 232—234）と述べ、その根拠として『太平御覧』を引き、

僚は牂牁（夜郎地区）、興古（雲南と広西の交接地帯）、郁林（広西、桂林、南寧地区）、交趾（越南北部）、蒼梧（広東西部及び桂林東西部）。

に分布居住していたことをあげている。

『御覧』の分布地域は、あまりにも広範囲にわたり過ぎ焦点を定めにくいだが、先にあげた劉氏の説は、さらに具体性がある。曰く、貴州、広西は言を待たず、雲南通海については『左伝』昭公元年杜注「今建寧郡の南に濮夷あり」を引き、通海は正に建寧郡の南であることや、四川における竹王祠の存在についても、東晋の時、僚人十全万人が、牂牁から蜀に入った史実や、榮州、邛州、大邑の地についても、出典をあげて僚の存在を立澄している。

こうして、竹王祠や竹王廟の分布は濮や僚といわれた人びとの分布と重なるところまでは見えてきた。しかし遺憾ながら現在のどの民族かを解明するにはほど遠い。しいて手がかりを求めるならば、以上の文面からは、竹王祠などを祀る人びとが、非漢民族であること、苗や蛮などとも呼ばれ、銅鼓を用いる民族であること、などがうかがえる程度である。そして何よりも隔靴搔痒の感を免れないのは、その殆どが地方志等の文献資料に據っているということである。

そこで試みに比較的近年の調査記録『嶺表紀蠻』をあげてみる。1920年代から30年代の広西を中心とした西南中国の少数民族の調査記録である。本書の「竹三郎」の項には次のように記してある。

黔中桂北の蛮民多くこれを祀り、伝うるに、夜郎侯の第三子と為す。侯、政に勤め民を愛せしも、不幸にして蚤死（若死）す。蛮人其の徳を思い、故に廟を立てて奉祀す。（劉1934. 85—86）

この場合の蛮民とはどのような人びとを指すのであろうか。

本書の著者、劉錫蕃は、その緒言において、広西の蛮族（今日の少数民族）を指し、

此等の蛮族には、苗、僛、侗、僮、儂、僚、狼、狔、狔、巴、狙、口口、ヤ、シャ、土拐、母老、仲家、蛋人……種々の名称有りとも雖も、苗、僛、侗、僮の四族を以て最も巨と為す。其の散布地点は、桂省のほか西南全局に普遍す。

といい、口口は広西には西隆、西林、鎮辺の数県にしかいないと述べ、「広西の口口」とタ

イトルを別にしているところをみると、「黔中桂北」つまり貴州の中部から、広西の北部の蛮民とは、苗、僂、侗、僮（壮）のいずれかということになる。その他の少数民族はこの四大民族の支派とみなし、それぞれグループ別に組入れている。

更に本書の「祭祀と神祇」の項には、十余の神名が記されており、それぞれ神を祀る民族の名称が、かなり明確に記されている。例えば、「盤古大帝」は僂族。「莫一大王」は、南北僮族の中の南部僮族が祀り、「竜神」は「苗僂侗壮を問わず、之を祀る」とある。ところがひとり「竹三郎神」のみが「黔中、桂北の蛮民」とあるのは何故であろうか。上記の四大族も含め、かつそこに包括されてしまった、他の少数民族の方にもウェイトがあると解釈すれば「儂、僚、狼、狔、狛、僂、沙、揮人は僮族に属す」が注目される。これら諸族を今日の少数民族の分類からみると儂人、沙人その他はおおむね壮族の支系と見なされているが、狛家は布依族、狔人は仡佬族、僚は仡佬族（の一部）と見ることができる。

ではこの地域に、現在どのような少数民族が居住しているであろうか。黔中、桂北の間には当然黔南も含まれるから、貴州中部、南部、及び広西北部ということになる。これを現在（1980年）の少数民族分布図（君島、1987）で見ると、布依族、苗族、侗族、仡佬族、水族、壮族、瑤族、仡佬族等である。この50年間にはそれほど大変化があったとは思われず、或は今でもひそかに竹王祠を祀る人びとがいて、現地調査が可能かもしれない。

上にあげた民族の中、瑤族を除く殆どは、第二章にあげた「竹中生誕伝承（竹中育兵も含む）」を持つ民族ともほぼ一致する。そして、これらの民族こそが、かつて「僚」とよばれた一大部族連盟を構成していた集団の末裔であり、連盟解体後、幾多の歴史的変遷をへて、今日の壮、侗、布依、仡佬、仡佬等の各族に分化してきた人びとなのだという説が成り立つのである。（尤中 1983. 132-187）

以上、本稿では、竹王に関する伝承と、竹王祠に関する資料の紹介に集点をおいた。ここから何かを推論するには、あまりにも少な過ぎる資料だが、この中のみで若干の感想を述べるとすれば、今回挙げた竹王神話に関する伝承資料は、仡佬、布依、侗、壮など、いわゆる夜郎百越説にとって、有利な資料であろう。

また今回あげた竹王祠の資料からは、竹王祠を祀る人々の明確な民族名を割り出すことは困難であったが、わずかに『嶺表紀蛮』の記載からは、同じく百越系の民族名が推定され、両者共に、本稿では百越説にとって、極めて有力な結果となった。

かくて、前稿の彝族（白彝）説とは異なり、本稿では、むしろ対立する百越説が浮上したのである。前者はチベット・ビルマ語族であり、山地農牧民である。後者は壮侗語族であり、平地農耕民である。この両者の間に、果してどのような関係が存在するのであろうか。次回別稿に於いては、この問題を中心に論述する予定である。

以上

引用文献

- 王家佑 1981 「夜郎与巴蜀」『夜郎考一討論集之二』200—215 貴州人民出版社。
- 何積全 1989 「竹王伝説初探」『貴州古文化研究』232—234 中国民間文学芸版社。
- 君島久子 1988 「虚幻的夜郎国」『神與神話』761—788 聯経出版事業公司
- 1989 「幻の夜郎国—竹王神話の原郷をめぐって」『東アジアの創世神話』79—101 弘文堂。
- 1987 『概説 中国の少数民族』三省堂。
- 金織斌 王廷揚 1989 「夜郎王的伝説」『南風』1期 貴州人民出版社。
- 黄国瑄 1985 「竹王的伝説」『南風』3期。
- 伍文義 1989 「濮越人与牂牁，夜郎關係考」『貴州民族研究』3期。
- 張英志 1979 「古夜郎国是我国苗族先民建立的」『夜郎考一討論文集之一』貴州人民出版社。
- 潘定智他 1986 『仡佬族文学資料滙編』貴州民族学院編。
- 尤 中 1979 『中国西南の古代民族』雲南人民出版社。
- 1989 『中国西南の古代民族（続編）』云南人民出版社。
- 1983 「夜郎民族源流考」『夜郎考一討論文集之三』貴州人民出版社。
- 藍鴻恩 1981 『広西民間文学散論』広西人民出版社。
- 劉錫蕃 1934 『嶺表紀蛮』商務印書館。
- 劉 琳 1983 「夜郎族属試探」『夜郎考一討論文集之三』貴州人民出版社。
- 林 河 1985 「侗族楊家将的伝説」『民間文学』7期。
- 梁庭望 1990 「壮侗語族に於ける竹節育兵の故事」原稿。

謝 辞

本稿は北京中央民族学院にて執筆した為、任学院長並びに林耀華、馬学良、索文清教授をはじめ諸先生の御教示を頂いた。ここに深く感謝申し上げると共に、貴重な原稿を寄せられた梁庭望教授、参考資料を提供された陶立潘副教授に対し厚く御礼申し上げます。また筆者の為に特別に便宜を計って下さった図書館長はじめ、館員の皆様に心から感謝の意を表します。